

2023年1月28日

2022年度聖路加国際大学大学院看護学研究科
課題研究

産前産後の訪問看護に関する調査
Survey of Prenatal and Postpartum Home-visit Nursing Services

21MW004

金田彩霞

要旨

【目的】

早産児や低出生体重児、メンタルヘル스에課題がある妊産婦の増加に伴い、助産師主体の訪問看護が開始されている。本研究の目的は、産前産後の訪問看護の開設経緯、運営の実態、ケア、利用実績を明らかにすることである。

【方法】

無記名自己記入式質問紙法を用いた量的質的研究である。助産師在籍で産前産後の母子対象の訪問看護ステーション 36 件の助産師 36 名に協力を依頼した。質問項目を作成し、量的データの度数とパーセント、記述統計量を算出し、自由記述は、得られた記述をコーディングし、カテゴリ化した。なお、本研究は聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：22-A079）。

【結果】

訪問看護ステーション 19 件の管理者から回答を得た（回収率 52.8%）。開設理由は【周産期メンタルヘルスの需要に伴い継続的な支援が必要なため】等 9 カテゴリが抽出された。対象事業所は、2017 年 2 件から 2022 年にかけて 19 件に増加し、利用者数は、2018 年度は合計 23 人、2022 年度は合計 856 人であった。全職員平均人数は、平均 8.63 人、常勤換算数の平均 3.39 人、助産師の平均人数 4.53 人であった。母子とも訪問しているのは、12 件（63.2%）、子どものみが 5 件（26.3%）、母親のみが 2 件（10.5%）であった。訪問の平均時間は、74.1 分（±18.0）であり、60 分と回答した事業所が 53%であった。子どものケアは、授乳・哺乳の介助 17 件（100%）が多く、医療処置の実施は 9 件（53%）であった。母親のケアは、育児相談 14 件（100%）が多かった。また、家族支援を実施している訪問看護ステーションが 10 件で夫のメンタルサポート・相談の 8 件が最も多かった。訪問看護の依頼元としては、病院・診療所（小児科医）が 73 人と最も多かった。子どもは、多胎 71 人、早産児 50 人が多く、母親は、産科的疾患 18 人、精神的疾患は 68 人で、うつ病が 21 人、育児不安、パニック障害・不安障害が 9 人であった。母子とも、産後の利用は、1 ヶ月未満の開始が最も多かった。利用期間は、期間別の人数で見ると、子どもは 48 人、母親は、30 人が 1 年以上で最も多い。しかし 1 年以上と比較して 1 年以内の人数は多く、子どもは、1 年以内が 58%、母親は 1 年以内が 52%であった。産前産後の訪問看護における助産師の強みとして、【専門性のある乳房ケア・授乳支援ができる】等 6 カテゴリが抽出されている。運営の課題は【人員確保が課題】等 8 カテゴリ、利用者へのケアの課題は【多職種での連携したケアが困難】等 7 つ、要望は【経済的課題の解決】等 4 カテゴリが抽出された。

【結論】

開設理由の多くが【周産期メンタルヘルスの需要に伴い継続的な支援が必要なため】であった。多胎、早産児、母親の精神的疾患での利用が多く、産後早期の開始と利用期間の短さが特徴であり、助産師の強みである母子一体のケアが提供されている。事業所数の不足、人材の確保、多職種連携体制の構築、助成制度や診療報酬等費用面の課題がある。